

第一回 【国語】

二〇一五

○問題文は9ページです。

それ以外に問題、答案用紙の2枚があります。

○時間は50分です。

○答えはすべて答案用紙に書きなさい。

第一回 国語科問題文

二〇一五

〔一〕 つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

「キミたち、仕事が速いね。この前、来てくれた中学生たちとはぜんぜんちがうわ」
担当職員の中宮さんから感心された。

「ほんとですか？ よかったあ」

照れ笑いする四人を代表し、チームリーダーの

1

「あたしたち、はじめてだからどきどきしてたんです」

生まれてはじめてのボランティア実習。北見第二中学校の生徒たちは、年に一度、いくつかのチームにわかれて校外へおもむき、午後の授業に代わってボランティアを体験する。

どこでなにをするのかは、一年A組ではくじびきで決めた。〈S〉のカードを引きあてた瞬間、このちゃんのもち場は特別養護老人ホームの〈清流園〉となった。

よりによって……。正直、最初はがっかりした。

それでも、このちゃんはまだまえのガッツですぐに頭を切りかえた。

「あたし、清流園のみんなを自分のおじいちゃんやおばあちゃんだと思って、全力でがんばることにした！」

親友の真琴にもそう宣言し、自分で自分をもちあげて、この日をむかえたのだった。

実際、いざ足をふみいれてみると、入居者のお年よりはみんな優しく、館内の雰囲気も思っていたより明るい。そうじ中も、車椅子でとおりがかったおじいさんやおばあさんたちが、「ありがとうね」「よろしくね」などと声をかけてくれた。

「あたし、特別養護老人ホームって、もっとこわい感じだと思ってた」

「ほくも。もっと暗い感じと思ってた」

急に雲ゆきがあやしくなったのは、中宮さんに一階の厨房へつれていかれてからだ。

「これから介護スタッフが栄養補助のジュースを配りに行くの。けっこう、これもひと仕事で。キミたちもお手伝いしてくれる？」

「はい」

「ここからさきは五人とも別行動、それぞれ担当者の指示にしたがってちょうだい」

「はい」

「キミたちの一番の仕事は、元気なあいさつよ。ちょっと大変かもしれないけど、これもここの現実。社会勉強だと思って、がんばって」

五人はまだ深く考えることなく「はい」の返事をくり返した。

「ちやかちやかやってかないとね、いつまでたっても終わらないのよ、この仕事」

このちゃん担当の加藤さんは、三十代なかばくらいの女の人。身のこなしがてきぱきとしていて、はつきりとものを言うところが、バスケ部のキャプテンと少し似ている。

「言っとくけど、わたしたちがまわるのは、ほとんど寝たきりの人たちの居室よ。ドリンクもひとりじゃ飲めないから、サポートが必要」

「わ、たいへんですね」

「序の口、序の口（始まったばかり）。ほんとに大変なのは、入浴のサポートや床ずれのケアよ。けど、そんな仕事ときには子どものボランティアなんて、いたってジャマなだけだから」

「ですよー、はい」

加藤さんのきつい物言いを、このちゃんは部活のノリでやりすごした。どんなに気むずかしい先輩を相手にしているときでも、こっちが笑顔でいるかぎり、それほどひどいことにはならないものだ。

「こんにちはーおやつジュースをおもちしました」

最初の居室へ入るときにも、言われたとおりに元気な声をはりあげた。

返ってきたのは、ひんやりとした沈黙。窓側と廊下側、ふたつのベッドに横たわっていたのは、このちゃんが想像していた以上に弱々しい、小さくやせた老人たちだった。深く落ちくぼんだ四つの瞳は、このちゃんのほうを見むきもしない。

彩りのない白い部屋。

鼻を刺激する消毒液のにおい。

びくともしない鉄のような静寂。

「今日はりんごジュースです。いま、用意しますからね」

この時点で早くも腰が引けていたこのちゃんをしり目に、加藤さんがしゃきしゃきと動きます。まずはジュースの紙パックを開けて、ふたつのコップへそそぐ。そこに顆粒の添加剤を加え、スプーンでかきまぜる。と、みるみる液体がとろみをおびていく。

「うまくものを飲めないお年よりは、こうしたほうがのどを通しやすいのよ」
加藤さんはそれをスプーンですくい、廊下側にいるおじいさんの乾いた唇へ運んだ。無表情のまま口をもごもごさせているおじいさんからは、どんな味なのかも伝わってこない。このちゃんは緊張しながらも、窓側のおじいさんへ歩みよった。

「おじいちゃん、りんごジュースです」

この人はあたしのおじいちゃんだ。そう自分に言いかけながら、おそろおそろゆるいゼリー状のジュースを口へ近づける。力なく開かれた唇にそっとスプーンをのせた。おじいさんが口を閉じ、のどもとの筋肉をかすかにふるわせる。よかった。のどを通ったようだ。

「あの、おいしいですか？」

だまつていられず、

2

とたんに、ぼうっと天井を映していたおじいさんの瞳が、初めてこのちゃんに焦点をむすんだ。みるみるその目に涙がたまり、つうつと、ひと筋のしずくがしたたり落ちる。

「おじいちゃん？」

あわてて顔をのぞきこんだこのちゃんに、おじいさんは言った。

「とんかつが食いたい」

気の毒だけでしょうがないのだと、部屋を出るなり、加藤さんは言った。

「あのおじいさん、もう菌はないし、腎臓は悪いしで、病人食以外は食べられないの。」

たぶん加藤さんの言うとおりなのだろう。頭ではわかっていても、とんかつが大好物のこのちゃんに、あの涙はせつなすぎた。痛ましいのはあのおじいさんだけではなかった。おなじような境遇のお年よりたちをつぎつぎ前にした。

とろみをつけたジュースですらものどを通せない人。

このちゃんを孫と思いこんで泣く人。

家族がむかえにこないと怒る人。

これが「この□□」ならば、悲しすぎる。

3

そう思いながらも、それを心の奥に閉じこめ

辛いときほど、よく笑う。それは、このちゃんがいつのまにか身につけたくせのようなものだ。部活の練習中、疲れたときほど「ファイト！」と声をはりあげるように、泣きたいときほど笑うことで自分を支えようとする。

「失礼しました！」

最後まで元気にあいさつをしつづけたこのちゃんに、うけもちの部屋をまわり終えると、加藤さんは初めてねぎらいの言葉をくれた。

「おつかれさま。あなた、タフね。たいがいの子は、とちゅうでぼうとなっちゃうもんだけど」

その言葉の意味をさとったのは、休憩室で、さきに仕事を終えていた四人と再会したときだ。

卓上のおかしにがついていた男子ふたりはともかく、女子のふたりはみごとに「□□」を絵に描いたような顔をしていた。

「相本さん、ゆうかちゃん。どうだった？」

声をかけても、返事がない。千鶴はうつろな目をしたままで、ゆうかはその千鶴のうでをぎゅつとにぎりしめている。

「長生きするの、やめたんだって」

「お母さんが寝たきりになったらどうしようって、こわくなったんだって」

代わって答えたのは、敬太郎とタボだ。

「そっかあ」

なんだか急に気がぬけて、このちゃんはへたりとパイプ椅子に腰をしずめた。

「あたしも、百まで生きるのやめよっかな」

「え、松原まで？」

敬太郎が目丸くする。

「松原は、なにがあっても落ちこまないと思ってた」

「そんなあ。っていうか、敬太郎くんたちは平気なの？」

「ぼくたちがまわった部屋は、わりと元気な人が多かったんだ。みんな自分でジュース飲めたし」

どうやら、ここに入居している全員が弱りきっているわけではないらしい。

少しほっとしたこのちゃんの横で、「ずるいよね」と、ゆうかが声をとがらせた。

「男子だけ、らかな仕事しちゃうって」

敬太郎とタボがこまった顔をするのを見て、このちゃんは自分^ウが□□□□□□であるのを思いだした。

「ゆうかちゃん、とりあえずいまは、自分の老後より、ここにいる人たちのことを考えよう。みんな、いやでも年をとっちゃったんだから、しょうがないよ。あたしたちが暗い顔してたら、みんなも暗い気持ちになっちゃうし、ちよつとむりしても、最後まで笑ってよう。ね」

空元氣を出して、「ファイト！」とこぶしを突きあげる。

ファイト！と、バスケット部の仲間たちなら返してくれるはずだった。

が、ゆうかはばたとテーブルに顔をふして言った。

「その体育会系のノリ、あたしはむり」

「あなたマナヅル見たことある？ 美しいのよ、それはそれは。わたしの故郷はマナヅルの越冬^{えいどく}地でね、毎年、冬になると飛んできたの。

マナヅルがね、こう、ばさーつと翼^{つばさ}を広げて飛ぶ姿……思いだすと、涙が出ちゃう。美しいのよ」

「いいなあ。あたしも見てみたい」

「いくらでも見られるわよ。十三歳^{さい}だもの」

チームSの最後の仕事は、「話し相手」だった。二階のカフェテリアでくつろいでいるお年よりたちとの交流。このちゃんに声をかけてくれたのは、どこかわいらしい上品なおばあさんで、のんびりと言葉を交^かわしているうちに、このちゃんはゆうかの一撃^{げつ}によるダメー

ジからじよじよに立ちなおっていった。

「おばあちゃんは、いま、おいくつですか」

「ええつと、八十六になるかしら」

「わあ、すごい」

「どうして？ だれでも生きていれば年なんてとるものよ」

「でも、八十六年も生きるなんて、すごいです。あたし、十三年目でも、ときどき疲れちゃうから」

「あら、ま、どうして？」

おばあさんが灰色^{はい}の眉^{まゆ}をよせる。

いけない。このちゃんはあわてて撤回^{ていし}した。

「うそ、うそ。あたし、ぜんぜん疲れません。毎日、すつごく楽しいです」

安心してもらおうと力をこめたのに、なぜだか、おばあさんはさびしげな目をしておじだまった。

「ゆうかちゃん、待って！」

千鶴のさけび声したのは、そのときだ。

ハッとしりむいたこのちゃんの目に、泣きながら廊下へ飛びだしていくゆうかの姿が映った。そのすぐあとを千鶴が追っていく。

ふたりがカフェテリアから去ったのを見て、とっさにこのちゃんも腰をうかした。

「すみません。ちよつと……」

一瞬^{しゅん}、見失ったふたりを見つけたのは、二階の女子トイレだった。洗面台にしなだれかかって泣いているゆうかをなだめるように、

千鶴が背^せなかをさすってやっていた。

「ゆうかちゃん、だいじょうぶ？ どうしたの」

なにを聞いても、ゆうかはただただしゃくりあげるばかり。代わりに横から千鶴が答えた。

「おばあちゃんと、ゆうかちゃんと、わたしと、三人で話してたの。そしたら、急にゆうかちゃんが泣きだして……その……最初ね、

おばあちゃんがゆうかちゃんに言ったの。なやみがあるなら話してちょうだいって。なんでかわかんないけど、ゆうかちゃんにだけ。

そしたら、ゆうかちゃんが……」

ちらりとゆうかをうかがい、千鶴が声を落とす。

「人間を信じるのがむずかしいって」

このちゃんはどきつとした。

人間を信じるのがむずかしい。ゆうかがそんなことを考えていたなんて。

「そしたらね、おばあちゃんが言ったの。簡単だよって。人をゆるすことに上手になればいい、そしたら信じることも楽になるよって。

わたしはよくわかんなかったんだけど、それ聞いたら、ゆうかちゃんが急に泣きだして……」

千鶴がまたゆうかをチラ見する。

気になる。が、このちゃんにはカフェテリアにいる人たちのことも気になった。ボランティアとしてここにいる以上、いまは自分たちの問題よりも、話し相手としての役目をはたすこと、少しでもお年よりたちをばげますことを考えなきゃいけないのでは、と。

「ゆうかちゃん」

そこで体育会系のノリにならないよう、声のトーンに気をつけながら言った。

「このことは学校にもどつてから、ゆっくり話さない？とりあえず、いまはカフェテリアにもどろう。ね、おばあちゃんたち、心配してるよ」
 またはねつけられるのか。内心びくびくしていたものの、ゆうかはすんなりとうなずいた。

「うん。わかった」

洗面台の鏡越しに、ゆうかの赤い目と目が合う。

「このちゃん。さっきはごめんね。やなこと言っちゃって」

「え？ ううん、ぜんぜん」

「あたし、チームSでよかったって、いまは思う。あのおばあちゃんに会えたから」
 ぼろり。言いながらまたほおに涙を伝わせる。

ゆうかちゃんって、いろんな意味で、すなおな子なんだな……。いつも素通りしていた家にはじめて上がったみたいに、このちゃんは
 このとき、ゆうかという子の奥の部屋まではじめて足をふみいれた思いがした。

さらなる「気づき」がもたらされたのは、ゆうかがトイレトベーパーで鼻をかむのを待って、いっしょにカフェテリアへもどつてからだった。

「あら、ほら、もどってきたよ」

「よかった、よかった」

三人の帰りを待っていた車椅子のおばあさんたちが、ゆうかをかこんで、いっせいにしゃべりだしたのだ。

「悲しくなっちゃったの？ かわいそうに。かわいいお目々が真っ赤だよ」

「ごめんねえ。おばあちゃんが、悪い話をしちゃったのかねえ」

「十三歳なんて、一等、感受性が強い年ごろなんだよ。あたしらにもあったっけねえ、そんな年のころが」

「ジュース飲む？ おばあちゃんのアメなめるかい？」

このちゃんがふいをつかれたのは、□々にゆうかを上げますおばあさんたちが、どこか生き生きとして見えたことだ。涙もろい女の子を心配しながらも、その声にはよゆうとハリがあった。さっきマナツルの話をしてくれたおばあさんも、にこにここと目じりを^a□でゆうかの手をさすっている。

あ、そっか。

老人たちのまんなかではにかむゆうかを前に、この日、はじめて

4

「ほんととにありがとね。おつかれさま」

中宮さんに見送られて清流園をあとにしたこのちゃんは、バス停へと続く静かな小径^{みち}を、みんなの後ろからひとりずついていった。ふいに横から声がした。

「松原さん、あのう」

歩幅^{はは}をせばめてならんだタボが、もじもじと話しかけてきた。

「話し相手してたときにね、すごくおもしろいおじいちゃんがいて、ぼく、ずっとくっついてたんだ。おじいちゃん、おじいちゃんって、トイレまであとをつけまわしてって。そしたら……女子トイレに入ってた」

「……」

「おばあちゃんだったんだ」

「傷つけちゃったかなあ」とタボがまんまるの顔を^b□せる。

「ぼく、今日のこと、前から楽しみにしてたんだよね。おじいちゃんとか、おばあちゃんとか、話をするの好きだから。けど、なんか、はりきりすぎて、からまわりしちゃったっていうか、やっちゃったっていうか……」

「からまわり、かあ」

「あたしも、今日はなんかズレてた。ジャンケンに負けてチームリーダーになって、はりきりすぎちゃったのかも」

「まさか、それは、まさか……」

「まさか？」

「おじいちゃんをおばあちゃんとまちがえたとか？」

答える前からこのちゃんが吹^ふきだすと、タボもつられて眉をたらしした。「まさか」「まさか」と言いあいながらふたりは笑った。
 今日のことをずっと忘れないでいようと、このちゃんはいかに強く、強く心にきざみこんだ。

つぎの文章を読んで、あとの問題に答えなさい。

子供たちの夏休みが始まり、早速、家族旅行に行ってきた。行先は子供たちに選ばせたが、中二になる長女の希望で、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンになった。当日は大変な混雑で、①新しいアトラクションは、実体験かと錯覚するほど、素晴らしいものだった。

しかし、3D映画やゲームなどにも共通することだが、最新技術を駆使して、視覚、聴覚、嗅覚、体感などに訴え、より実体験に近いものを再現しようとする先にあるのは何なのか、疑問に感じた。びっくり箱はびっくり箱にすぎず、一度目は驚かされても、二度目は驚かされない。それゆえバーチャル・リアリティ（仮想現実）を駆使した体験型アトラクションは、より過激なものを目指すようになる。こうした疑似体験をしないと、人は感動できなくなっていくのか。私なりに、いろいろ考えさせられた。

しかし、こうしたバーチャル・リアリティに唯一、対抗できるものがある。文字表現だ。人類が生まれた頃から親しんできたこの力は、最新テクノロジーごときに、簡単に敗れるはずがない。人は一つの文字からイメージを膨らませ、独自の映像を脳内で再生させることもできるし、文字で表現されていないことを、文脈から読み取り、イメージを構築することもできる。これこそ文字による表現が、絵画や音楽と大きく異なる点であり、文字を持つ人類にだけにできることである。

『巨鯨の海』を書いた時、私は②「おの香りや顔に当たる飛沫まで感じられるよう、表現をねりあげた。どうすれば、読者に一緒に鯨船に乗ってもらえるか、共に銛を放ち、共に鯨を捕らえることができるのか、また共に笑い、共に悲しめるかを徹底して③した。『天地雷動』では、読者を長篠の戦場に連れていくことを目指した。戦国時代の戦場では何が見え、何が聞こえ、何が臭い、何を感じるのか、実際に体験してもらおうと思った。『そんなものは④文学ではない』と言われてしまえばそれまでだが、今の時代、それはエンタメ（娯楽）文芸の目指すべき⑤の一つだと思っている。しかもそれは、最新技術を駆使したバーチャル・リアリティに対抗できる唯一の⑥でもあるのだ。

文字表現が、そう簡単に敗れるとは思わない。そうしたものは距離を置き、人間の内面を深く描くのも、文芸の向かうべき一つの道だと思う。しかし私は、⑦「一本でバーチャル・リアリティと戦うつもりだ。こうした時代に生まれ、数十億円単位の製作費をかけた体験型アトラクションと戦えることは、作家にとって、この上ないかほうである。」

第一回 国語科問題

〔一〕 (一) 1～4には、つぎのア～エのどの文がそれぞれ入りますか。記号で書きなさい。

ア このちゃんは表面的には笑顔でい続けた。

イ このちゃんの顔から笑みが消えた。

ウ このちゃんは晴ればれとした笑顔を返した。

エ このちゃんは精いつぱいの笑顔で聞いた。

(二) [A]の場面の中でこのちゃんはおじいさんたちの生活をどのようなものだと感じましたか。自分のことばで書きなさい。

(三) アーウに入る最もふさわしいことばを、文中からマス目の字数でそれぞれ探して書きなさい。

(四)線Bとありますが、それは具体的にどのようなことなのかを、つぎのようにまとめました。

1、2にあてはまることばを、文中からマス目の字数で探して書きなさい。

を出して、つらい時こそ無理に笑って とするいつものやり方を否定されたこと。

(五)線Cとありますが、やがてこのちゃんはその理由に気づきました。おばあさんはなぜ「さびしげ」だったのか、自分のことばで書きなさい。

(六) ~~~~~線Dとありますが、これはどういうことですか。自分のことばで書きなさい。

(七) a、bに入るふさわしいことばを考えて、後につながるようにひらがなで書きなさい。

(八) このちゃんは、この一日のボランティアの体験からどのようなことを学びましたか。文章全体から考えて、このちゃんの成長について自分のことばで書きなさい。

〔二〕 (一)①～④を漢字に直しなさい。必要なら送りがないも書きなさい。

(二) アーウに入る最もふさわしい二字の熟語を考えて、書きなさい。

(三) ~~~~~線Aとありますが、それはどのようなことなのかを、つぎのようにまとめました。

a、cにあてはまることばを、文中からマス目の字数で探して書きなさい。

人は a (2字) b (2字) c (4字) を求めるようになること。

(四) [文学]^Bについて、ここという「文学」とはどのようなものですか。文中から十字で探して解答らんに続くように書きなさい。

(五)線Cについて、つぎの問いに答えなさい。

(1) 「槍一本」とは何のことですか。文中から四字でみつけて、書きなさい。

(2) 「戦う」とありますが、筆者は人間にどのような力があるから可能であると考えていますか。ふさわしい一文を文中から探して、そのはじめの五字を書きなさい。句読点もふくみます。

第一回 国語科答案用紙

○時間は五十分です。
○答えはすべて答案用紙に書きなさい。

第一回	
氏	名
番	号
得	点

〔一〕

(一)
1
2
3
4

(二)

(三)

ア
イ
ウ

(四)

1
2

(五)

(六)

(七)

・目じりを
a
て
・顔を
b
せる

(八)

〔二〕

(一)
①
へいこう
②
しお
③
ねりあげた
④
かほう

(二)

ア
イ
ウ

(三)

a
b
c

(四)

もの

(五)

(1)
(2)